



## ロゴフォリック階層と視点投射

著者	西垣内 泰介
雑誌名	Theoretical and applied linguistics at Kobe Shoin : トークス
巻	18
ページ	85-102
発行年	2015-03-05
URL	<a href="http://doi.org/10.14946/00001665">http://doi.org/10.14946/00001665</a>

# ロゴフォリック階層と視点投射\*

西垣内 泰介

神戸松蔭女子学院大学 言語科学研究所

gauchi[at]shoin.ac.jp

---

## The Logophoric Hierarchy and the Point-of-View Projections

Taisuke Nishigauchi

Shoin Institute for Linguistic Sciences, Kobe Shoin Women's University

### Abstract

Sells (1987) のいわゆる「主観表現」に関わる分析に関連し、「伝達源」は同時に「自己」「基準」であり、「自己」は「基準」でありうるが、その逆はないという「ロゴフォリック階層」の概念的基盤をなす含意関係について考察し、本稿の分析ではこの現象が下位の視点投射が上位の視点投射の位置へ主要部移動し、それによって上位の視点投射の指定部にある *pro* の指標が下位の視点投射指定部の *pro* に受け継がれることによって捉えられることを提示する。問題の主要部移動は「最小性」の効果を示すことを論じる。

The present article discusses the Logophoric Hierarchy proposed by Sells (1987) in light of the analysis making crucial use of the Point-of-View (POV) projections. The POV-sensitive elements, along with *zibun*, come into Agreement with one of the POV-projections, projecting *pro* in the respective SpecPOVP. The effect of the Logophoric Hierarchy will be captured by proposing head-movement within the POV-domain, whereby broadening the domain of Agreement involving the relevant POV-head.

キーワード: ログフォリック階層, 視点投射, 再帰束縛, 一致, 主要部移動

**Key Words:** the Logophoric Hierarchy, POV projections, reflexive *zibun*, Agreement, head-movement

---

\*本研究の一部は、日本学術振興会科学研究費補助金（基盤研究（C）「「視点」とモダリティの言語現象—「意識」、エンパシー、阻止効果—」（2014年度～2017年度、研究代表者：西垣内 泰介、課題番号：26370468））による援助を受けている。

## 1. ログフォリック階層

Nishigauchi (2014), 西垣内 (2015) で提示した「自分」束縛の分析は、その基盤として視点投射の指定部にある pro のコントロールがあり、そのコントロール・ストラテジーにおいて中心的な働きをするのは「意識焦点」と「視点焦点」であると主張した。一方、Sells (1987) によって提案されているログフォリック階層 (the Logophoric Hierarchy) では、次の3つの談話役割 (discourse roles) がログフォアの現象を説明するとしている。

(1) 伝達源 (source) : 伝達の意図的行為者

自己 (self) : 命題内容がその心理状態・態度を記述する人

基準 (pivot) : その (時空に関わる) 位置に関して命題内容が評価される人

この階層は、「伝達源」である人はその心理状態が表現されている人 (「自己」) でもあり、またその人の視点から命題内容が記述されている人 (「基準」) でもあるが、その逆は成り立たないことなどが根拠となっている。

この考え方の根拠を形成する経験的事象について、Nishigauchi (2014), 西垣内 (2015) で提案、展開した分析方法でどのような分析が可能であるかを示すのがこの論文の目的である。

Sells (1987) はログフォリック階層の妥当性を証明する経験的事実として、日本語の久野 (1978) が「主観的表現」と呼んでいるいくつかの表現の視点に関する意味解釈についての分析と議論を展開している。Sells (1987) の分析はきわめて微妙で繊細な意味解釈に依拠したものであり、彼によって提示されている経験的データを理解することが必要である。次節で、関連するデータと意味解釈について少し詳しく見ることにする。

## 2. ログフォリック階層と「主観表現」

Sells (1987) のログフォアの分析で中心的な役割を果たしているのが、久野 (1978) が「主観的表現」と呼んでいる一連の表現と彼の談話役割との対応関係である。「主観表現」のひとつとして Sells (1987) があげている「バカの」を含む次の文 (Sells, 1987, (45)) を考えてみよう。

(2) タカシ<sub>i</sub>は太郎に [バカのヨシコが自分<sub>i</sub>を追いかけ回していること] を話した。

この文で「バカのヨシコ」という評価をしているのは「タカシ」またはこの文を発話した話者 (私) である。「タカシ」は従属節の内容の発言者であり、ログフォリック階層の談話役割としては「伝達源」であり、その点ではこれを発話した話者も同じである。(「外的伝達源」(External Source)) Sells (1987) によると、この時「タカシ」は「伝達源」であるだけでなく、従属節が彼の考えを表しているという意味で「自己」でもあり、その時空的位置を指定されている「基準」(Pivot) とも考えられる。「バカの」は「伝達源」と関連づけられ、伝達源は「自己」でも「基準」でもあるのである。

「バカの」が「伝達源」に対応すると考えられる根拠として、次の2つの文を考えてみよう。

- (3) a. [バカのヨシコが自分<sub>i</sub>を追いかけ回していること]がミチコ<sub>i</sub>を絶望へ追いやった。  
(Sells, 1987, (45))
- b. [バカのヨシコが自分<sub>i</sub>を呼びにきた]時、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

「ミチコ」の心理状態を表現する(3a)では「自分」の先行詞は「自己」である「ミチコ」である。しかし、この文での「バカの」は「ミチコ」の視点からの表現とは考えられない。同じ文の中に発言者の役割をもつ登場人物はいないので、この文を発話した話者(「外的伝達源」としか解釈できない。(3b)ではSells(1987)の分析で「基準」の役割を持つ「タカシ」が「自分」の先行詞と読めるが、「バカの」はやはり話者の視点からの記述でしかない。

「バカの」が「伝達源」の視点を表すのは、このような表現はそのように発話ないし「発音」されることがポイントとなるからで、「自己」のように「思う」だけでは関連づけられない。このような表現は「～のやつ」「～の野郎」のような悪い意味を持った表現が多いようである。

なお、Sells(1987)が「基準」(Pivot)を表す文として用いているのは次の文(Sells, 1987, (48))である。

- (4) 太郎は[バカのヨシコが水を自分の上にこぼしたので]濡れてしまった。

Nishigauchi(2014)で観察しているように、「ので」は「証拠性」を表す理由節の主要部であり、この文での「太郎」は従属節の内容を意識していると解釈するのが自然だと思われる。この文の「太郎」はむしろ「自己」であると思われる。

次にSells(1987)が「自己」と関連づけられと考える「主観表現」として「不可解にも」を含む文を考えてみよう。

- (5) a. タカシ<sub>i</sub>は[ヨシコが不可解にも自分<sub>i</sub>をつけ回していると]言った。
- b. [ヨシコが不可解にも自分<sub>i</sub>をつけ回していること]がタカシ<sub>i</sub>をいらだたせている。
- c. ヨシコが不可解にも自分<sub>i</sub>を呼びにきた時、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

(5a,b)はそれぞれSells(1987)の例文(49),(50)に「自分」を加えたものである。「タカシ」が「伝達源」である(5a)、「タカシ」が「自己」である(5b)のいずれでも「タカシ」は「自分」の先行詞であり、「不可解」は「タカシ」の視点からの評価と読むことができる。しかし彼の分析で「基準」(Pivot)と位置づけられる(5c)の「タカシ」はこの文の「不可解」の評価者とは読めず、この文の「不可解」は話者(「外的伝達源」)の評価としか考えられない。

「証拠性」を表す「そう(だ)」と呼応する副詞「今にも」は「自己」の視点を表すと考えられる。

- (6) a. 犯人<sub>i</sub>は[警察が今にも自分<sub>i</sub>に迫って来そうだ]と言った。  
 b. [警察が今にも自分<sub>i</sub>に迫って来そうなこと]が犯人<sub>i</sub>をいらだたせている。  
 c. [警察が今にも自分<sub>i</sub>に迫って来そうな時]、犯人<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

(6ab)では、「今にも～そう」が「犯人」の視点ないし意識を表すものとして読めるが、(6c)では、この表現はこの事態を記述している人、つまり「話者」の視点を表している表現としか読めない。

Sells (1987, 464) は、Kuno (1972) を引用して、「自己」と関連づけられる表現として *secretly*, *mistakenly*, *inexplicably*, そして *the very idea* (*The very idea that he was about to be fired drove Max to despair.*) を挙げている。

Sells (1987) は、「基準」(Pivot) と対応する「主観表現」として「愛しい」を考えている。「愛しい」は久野(1978)においても「視点焦点」の視点を表す表現として論じられている。久野は同様の表現として「なつかしい」などをあげている。しかし、「愛しい」「なつかしい」などは「評価」の意味を含んでいるので、本当に「意識」に関連しない表現と言えるか疑問である。ここでは純粋にダイクシスに関わる表現として「となりの」を含む次の例文を考えてみよう。例文(7a, b)はそれぞれ Sells (1987) の(56), (58)を改訂したものである。

- (7) a. タカシ<sub>i</sub>は太郎に[となりのヨシコが自分<sub>i</sub>を憎んでいること]を話した。  
 b. [となりのヨシコが自分<sub>i</sub>を憎んでいること]がタカシ<sub>i</sub>を絶望へ追いやった。  
 c. となりのヨシコが自分<sub>i</sub>をけなしている間、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

これらすべての文で「となりの」は「タカシ」の視点からの表現と読むことができる。「基準」に関連づけられる表現「となりの」は、「自己」「伝達源」の視点を表す解釈を許すのである。

このように、Sells (1987) の観察では、「伝達源」と対応する「主観表現」は「伝達源」の視点からの評価としか読めないが、「自己」と対応する「主観表現」は「自己」と「伝達源」の視点を表し、「基準」(Pivot) と対応する「主観表現」は「基準」「自己」「伝達源」を表すという階層関係が存在する。

この基盤となっているのは、次の Sells (1987, p. 456) のこれらの談話役割についての、「コミュニケーションをする人(「伝達源」)は意識を持っており(「自己」)、他者の心の中を表そうとするとその人の物理的側面(「基準」)をかりなければならない」と要約できる3つの役割のあいだの含意関係である。

この意味的直感に基づいた一般化では捉えられない、きわめて微妙で繊細な現象がいくつかが存在する。まず、「伝達源」が明示的に現れる文の中でも(2), (7a)では「バカの」

「となりの」は文中に現れる「伝達源」の視点を表す表現と読むことができるだけでなく、「(外的) 話者」の視点を表す表現と解釈することが可能だが、(5a)では「不可解にも」を「話者」の視点を表す表現として読むことができない。

また、「基準」に関連づけられる「となりの」は(7a)では文中に明示される「伝達源」の視点を表すだけでなく「話者」の視点を表す表現として読むことができるが、(7bc)ではいずれも「話者」の視点を表す表現として解釈することができない。

このような、「ロゴフォリック階層」では捉えられないきわめて微妙で繊細な現象に、「視点投射」と「一致」に基づく分析を用いて光を当てていくことがこの論文の目的である。

### 3. 「主観表現」と視点投射

#### 3.1 「主観表現」と「一致」

本分析では、西垣内(2015)の分析的枠組みによって、「自分」を含む、視点に関わる語彙要素は「視点投射」のいずれかと「一致」の関係を持つと考える。「主観表現」は視点投射の指定部にある *pro* と同一指標を与えられると考える。次の  $\sigma$  が主観表現である。POVP 指定部には「視点保持者」(POV-holder)である *pro* が投射される。

(8) ... [<sub>POVP</sub> *pro*<sub>i</sub> [ ...  $\sigma$ <sub>i</sub> ... ] *POV*<sub>i</sub> ]

われわれの分析では、Sells (1987)の談話役割は、特定の視点投射指定部 *pro* のコントローラと次のように対応する。

(9) Sells (1987)の談話役割    指定部 *pro* のコントローラ

伝達源 (source)	発話行為 (Speech Act Phrase)
自己 (self)	評価 (Evaluative), 証拠性 (Evidential)
基準 (pivot)	受益 (Benefactive), ダイクシス (Deixis)

つまり、Sells (1987)の「ロゴフォリック階層」はわれわれの分析の基盤である視点投射の構造的階層関係と対応しており、「ロゴフォリック階層」の上位にある談話役割はわれわれの視点投射で上位に位置する範疇の指定部コントローラに対応する。

これに対応して、「主観表現」はそれぞれ特定の視点投射と「一致」と考える。「伝達源」の視点を表すとされる「バカの」は「言語行為」投射 (SpAP), 「自己」の視点を表す「不可解にも」は「意識クラス」の視点投射つまり「評価」投射 (EvalP) ないし「証拠性」投射 (EvidP), 「基準」の視点を表す「となりの」は「基準クラス」の視点投射「受益」投射 (BenefP) と「ダイクシス」投射 (DeixP) とそれぞれ「一致」する。

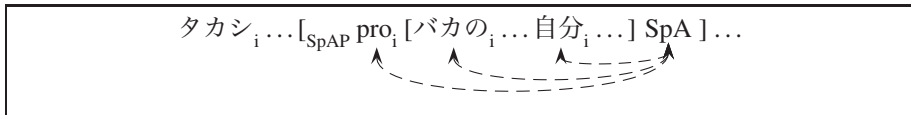
「言語行為」投射 (SpAP) については、Speas (2004)はその指定部に「話者」(Speaker)の役割を持つ *pro* が存在すると考えている。「話者」である *pro* をコントロールする項は「意識焦点」となれる項の中でも発言動詞の主語に限定される。これは文の項構造から同

定できることなので、Sells (1987) のように「伝達源」という談話役割をたてる必要はないと考える。

### 3.2 「伝達源」と「一致」

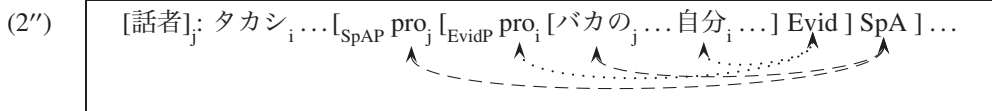
この観点から (2) をもう一度考えてみよう。われわれの分析では「バカの」「自分」いずれも「言語行為」投射 SpA と「一致」する。SpAP 指定部の pro は「意識焦点」で発話動詞の主語である「タカシ」によるコントロールを受ける。

(2) タカシ<sub>i</sub>は太郎に [バカの<sub>i</sub>ヨシコが自分<sub>i</sub>を追いかけ回していること] を話した。



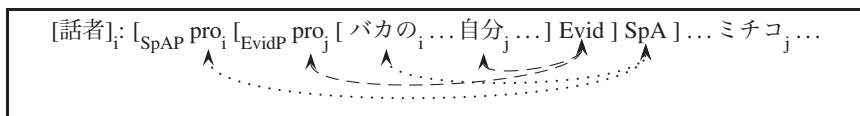
この「一致」とコントロールの関係によって「バカの」が主文主語の視点からの表現であることが捉えられる。

Sells (1987) が観察するように、(2) にはもうひとつ、「自分」の先行詞は「タカシ」だが、「バカの」はこの文を発話した話者 (external speaker) の評価であるという解釈がある。この解釈は、発言動詞の主語「タカシ」が「意識焦点」で「証拠性」投射 (EvidP) 指定部の pro のコントロールと考えると、「発話行為」(SpAP) 投射指定部の pro は話者以外に可能な候補者がいないことによって捉えられる。

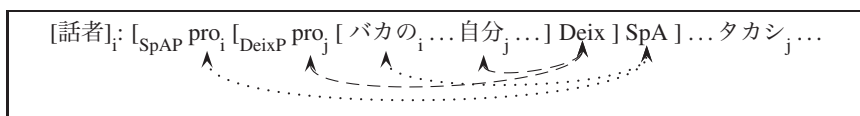


次に (3ab) を考えてみよう。これらは次のような指標と構造を持つ。

(3') a. [バカの<sub>i</sub>ヨシコが自分<sub>j</sub>を追いかけ回していること] がミチコ<sub>j</sub>を絶望へ追いやった。(Sells, 1987, (45))



b. [バカの<sub>i</sub>ヨシコが自分<sub>j</sub>を呼びにきた] 時、タカシ<sub>j</sub>はぐっすり眠っていた。



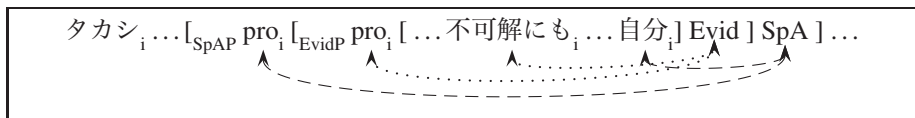
これらの「自分」はそれぞれ「証拠性」Evid, 「ダイクシス」Deix と「一致」の関係を持ち、それぞれ EvidP, DeixP の中で pro による束縛を受け、それらの pro はそれぞれ「意

識焦点」、「視点焦点」によるコントロールを受ける。いっぽう、「バカの」は「言語行為」(SpA)と「一致」の関係を持ち、SpAPの中でproによる束縛を受けるが、文中には「意識焦点」でかつ発言動詞の主語に該当する項がない。そのため、文中のコントロールが成立せず、他に候補がなければ「話者」がコントローラとなり、「話者」の視点を表すことになる。

### 3.3 「一致」の拡大と主要部移動

Sells (1987)が「自己」と関連づけられと考える「主観表現」「不可解にも」を含む文について考えよう。(5a)は、われわれの分析では次のような「視点投射」を含む構造と指標を持つ。

- (10) タカシ<sub>i</sub>は[ヨシコが不可解にも自分<sub>i</sub>をつけ回していると]言った。



(10)では、Sellsの言う「伝達源」である「タカシ」が本来「自己」と関連づけられる「不可解にも」の視点保持者と読むことができる。これが、「伝達源」である項は「自己」でも「基準」でもあり得るという、「ロゴフォリック階層」のひとつの根拠をなしている含意関係である。

われわれの分析では、問題の副詞「不可解にも」が「証拠性」の投射(Evid)と「一致」の関係を持つと考える。この分析で、Sellsの言う含意関係、つまり「不可解にも」が「伝達源」(われわれの分析では「意識焦点」)である「タカシ」の視点を表すという事実をどのように捉えることができるだろう。

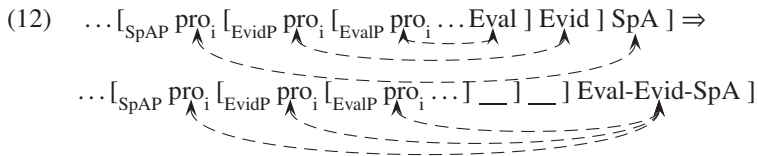
われわれの見方からすると、問題の含意関係は、視点投射の上位の投射の指定部proの持つ指標は下位の投射の指定部proに受け継がれると考えることで捉え直すことができる。

- (11) ... [SpAP pro<sub>i</sub> [EvidP pro<sub>i</sub> [EvidP pro<sub>i</sub> ... ] ] ]

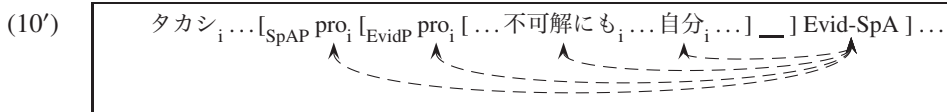
これで、proの指標が同じである限り、「発言者」である人は「評価者」であり、「目撃者」でもあり...という含意関係を視点投射の階層構造関係によって捉えることができる。

では、この指標の受け継ぎはどのようにして行われるのか？この現象は、視点投射領域の中で、下位の視点投射が上位の視点投射に従属する、あるいは取り込まれる(incorporated)ことによって、上位の視点投射の「一致」の領域が広がる現象と見ることができる。これを可能にするのは、下位の視点投射が上位の視点投射の位置へ主要部移動(head-movement)することである。





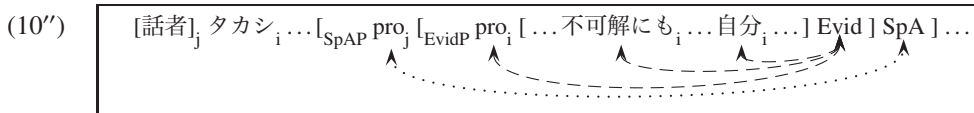
(10) では、「証拠性」投射 (Evid) が「不可解にも」と「一致」の関係を持つ。「証拠性」投射の上位に「発話行為」投射 (SpA) が投射されるが、「証拠性」投射主要部は (12) の主要部移動によって「発話行為」主要部に取り込まれる。



これによって、「発話行為」(SpA) が拡大した「一致」の領域を持つ。SpAP 指定部の pro は発言動詞の主語である「タカシ」にコントロールされうが、2つの pro の指標が拡大した「一致」のため同一となり、結果として「不可解にも」の視点保持者が「タカシ」となる。

興味深いことに、(5a)=(10)の「不可解にも」は、「話者」すなわち「外的伝達源」(External Source)の視点を表す解釈を許さないようである。われわれの分析では、(2')で発言動詞の主語「タカシ」を「意識焦点」としたように、Sells (1987)のシステムで「タカシ」を「自己」とすれば、「話者」は「伝達源」となり、ロゴフォリック階層に従って、「伝達源」である「話者」は「自己」の役割も持つことができ、「不可解にも」の視点保持者となれるという予測が得られるが、(5a)の「不可解にも」が「話者」の視点を表すことができないというわれわれの判断が正しいとすれば、ロゴフォリック階層は誤った予測をすることになる。

われわれの分析では、「タカシ」を「意識焦点」として、証拠性投射の指定部 (SpecEvidP) の pro のコントローラとし、「発話行為」投射指定部 (SpecSpAP) の pro のコントローラを「話者」とした場合、次の表示が得られる。



この表示では、「話者」は「発話行為」投射指定部 (SpecSpAP) の pro のコントローラであるが、「発話行為」投射は「不可解にも」と「一致」の関係を持たない。このことが「不可解にも」が「話者」の視点を表さないことを説明する。

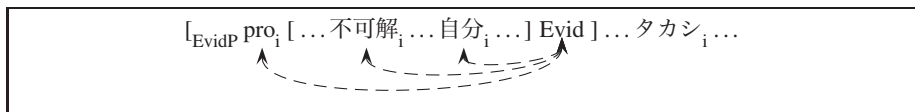
Sells (1987)のロゴフォリック階層をわれわれの視点投射にもとづく分析的枠組みで捉え直す上でのひとつの考え方として、本来「自己」の視点を表す「不可解にも」のような要素がロゴフォリック階層の上位にある「伝達源」の視点をも表すことができるとい

う事実を、「不可解にも」が「証拠性」投射 (Evid) だけでなく「発話行為」投射 (SpA) と「一致」できると考えることも潜在的には可能な方法である。

しかし、(5a) で「不可解にも」が「話者」すなわち「伝達源」の視点を表すことができるのは、(10') で示すように「発話行為」投射指定部の pro が「証拠性」投射指定部の pro と同一の指標を持つと考えられるときに限定される。「不可解にも」が「発話行為」投射と「一致」できるのは、(10') のように、「証拠性」投射が「発話行為」投射の位置へ主要部移動して、いわば「発話行為」投射の「一致」領域が広がったときだけなのである。

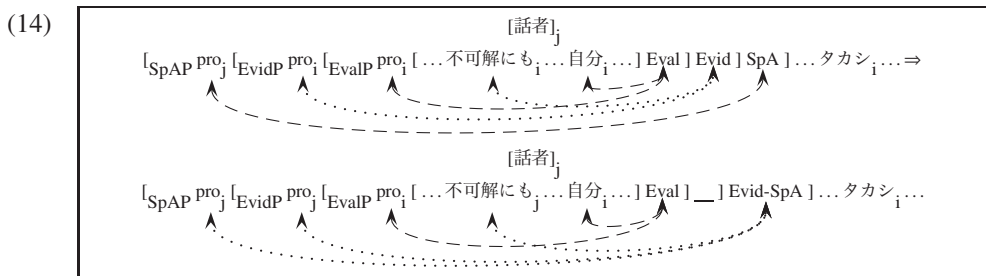
次に (5b) を考える。この文のひとつの解釈は次のような「一致」と指標の関係で表示される。

- (13) [ヨシコが不可解にも自分<sub>i</sub>をつけ回していること] がタカシ<sub>i</sub>をいらだたせている。  
(=(5b))



この解釈では、「不可解」「自分」いずれも「証拠性」投射と「一致」の関係を持ち、その指定部の pro が「タカシ」にコントロールされることで、「タカシ」が「自分」の先行詞であり、「不可解」の視点保持者であることが説明される。

Sells (1987) では言及されていないが、(5b) には「不可解」が「(外的) 話者」の視点を表す解釈もある。この解釈は、「不可解」が「証拠性」投射と「一致」の関係を持つが、「証拠性」主要部が「発話行為」投射の位置へ主要部移動して、後者の「一致」領域が広がることによって得られるものと考えられる。

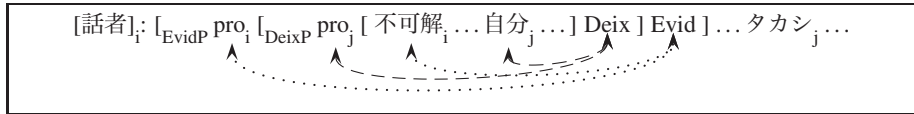


この時、「自分」は「証拠性」よりも下位にある「意識」クラスの視点投射と「一致」する必要がある。ここでは、「評価」投射 (Eval) が投射して「自分」と一致し、その指定部の pro が「タカシ」によってコントロールされると考えている。あるいは、「証拠性」投射を「意識クラス」の視点投射のデフォルトと考え、反復的 (recursive) に投射すると考えることも可能である。

(10c) では、「ダイクシス」投射 (Deix) が「自分」と「一致」し、「不可解にも」が「証拠性」投射 (Evid) と「一致」し、その指定部に pro が投射される。しかし文の中には「意識

焦点」と認定できる項がないので、「証拠性」投射の pro は他に候補がなければ話者（外的話者）にコントロールされ、その結果「不可解にも」は「話者」すなわち「私」の視点をあらわすことになる。

- (15) [ヨシコが不可解にも自分<sub>j</sub>を呼びにきた]時、タカシ<sub>j</sub>はぐっすり眠っていた。



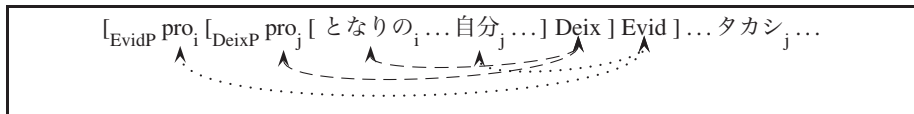
### 3.4 主要部移動と「最小性」の効果

この節では Sells (1987) が「基準」(Pivot) の視点を表すと考える「となりの」を含む文について考える。例文 (7a) については (5a) の「証拠性」投射を「ダイクシス」投射に置き換えるだけで他は同じ分析になるので、ここでは繰り返さない。

しかし、(7b, c) の両文は Sells (1987) の「ロゴフォリック階層」が誤った予測をする、理論的・経験的に重要な意味を持ったものである。

まず、(7b) について考える。この文の「となりの」は、次に示すように「ダイクシス」投射と「一致」の関係を持つ。

- (16) [となりのヨシコが自分<sub>i</sub>を憎んでいること]がタカシ<sub>i</sub>を絶望へ追いやった。



しかし、「ダイクシス」投射指定部の pro は「視点焦点」(Empathy Focus) をそのコントローラとして探すが、文中の「タカシ」は感情の持ち主と解釈される「意識焦点」である。しかし、「ダイクシス」投射が主要部移動して「証拠性」投射と融合すれば、後者の「一致」領域が拡大する。

- (17) [EvidP pro<sub>i</sub> [DeixP pro<sub>i</sub> [となりの<sub>i</sub>...自分<sub>i</sub>...] \_ ] Deix-Evid ] ... タカシ<sub>i</sub> ...

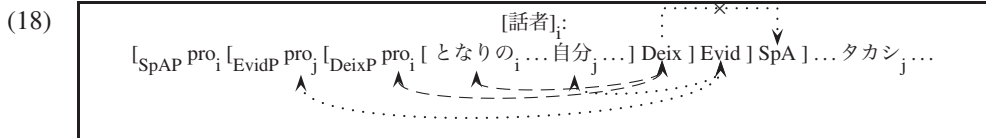
このように、「タカシ」が「証拠性」投射指定部の pro のコントローラであることで「自分」の先行詞となり、主要部移動によって「ダイクシス」投射が「証拠性」投射と融合することで「一致」の領域が広がり、「ダイクシス」投射指定部の pro のコントローラともなることで、「となりの」の視点保持者としての解釈が可能になる。

ここまでは、Sells (1987) の「ロゴフォリック階層」が予測する通りである。

例文 (7b) について特筆すべきことは、この文の、本来「基準」の視点到に帰される「となりの」は (17) に示されるように文中の「意識焦点」、Sells (1987) の「自己」の視点を

表す解釈は可能だが、Sells (1987) のいう「伝達源」である（外的）話者の視点を表す解釈はできないということである。非常に微妙な判断だが、「ロゴフォリック階層」はこの文の「となりの」が話者の視点を表すとする解釈の存在を否定する根拠はなく、この文の問題の解釈は本分析が「ロゴフォリック階層」と異なる予測をするポイントとなる。

(16) で示したように、この文の「自分」は「証拠性」投射と「一致」することで、その指定部 pro が「意識焦点」である「タカシ」のコントロールを受け、結果「タカシ」が「自分」の先行詞となる。他方、「となりの」は「ダイクシス」投射と「一致」の関係に入る。ここまでは (16) と同じである。しかし、「となりの」が「ロゴフォリック階層」が予測するように話者の視点を表すためにはそれが「一致」の関係にある「ダイクシス」投射が「発話行為」投射の位置へ主要部移動する必要がある。ところが「ダイクシス」投射が「発話行為」投射の位置へ上がるためには異なった指標を持つ「証拠性」投射を越えて移動しなければならない。



この文で「となりの」が話者の視点を表す解釈がないことは、われわれの分析では「ダイクシス」投射が「発話行為」投射の位置へ主要部移動できないことで説明される。この移動を阻むのは異なった指標を持つ「証拠性」投射の存在であり、これは「移動」に課せられる一般的な制約である Rizzi (1990) の意味での「最小性」(Minimality) が関与していると考えられる。

(19) 最小性 (Minimality):  $x$  が  $y$  を、 $y$  が  $z$  を  $c$  統御し、 $x, y, z$  が同種のレベル（語彙レベルか句レベル）であるとき、 $x$  と  $z$  を統語的に関連づける操作は阻止される。

「最小性」の原則は、広く移動規則に課せられる制約と考えられており、ここに「最小性」の効果が見られるということは、問題の現象の分析に移動規則が関与していると主張する本分析への積極的な証拠と考えることができる。

### 3.5 「基準」と「有意識条件」

この節では、(7c) について考えていく。

(20) となりのヨシコが自分<sub>i</sub>をけなしている間、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。=(7c)

この文は、Nishigauchi (2014)、西垣内 (2015) で論じられている「有意識条件」(the Awareness Condition)、すなわち「再帰形の先行詞はその指示対象が再帰形を含む節の表す状況を意識していると解釈できるものでなければならない」と要約できる制約を破っていると思われるが、その容認性は低いものではない。

「有意識条件」の違反にもかかわらず(20)の容認性が高いのは、「ダイクシス」表現「となりの」が「自分」を含む節にあることによる。(20)から「となりの」を除いた次の文は容認性が低い。

(21) \*ヨシコが自分<sub>i</sub>をけなしている間、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

Nishigauchi (2014), 西垣内 (2015) では、(21) のような文は、「自分」が「証拠性」投射の領域に現れ、その指定部に投射する pro は「意識焦点」を探すが、文中の「タカシ」は「意識焦点」の資格を持たない。従ってコントロールが成立しないので「自分」の先行詞が得られないことが(21)の非容認性を説明する。

(22) ...[意識焦点]...[EvidP pro [...自分...]]

Nishigauchi (2014), 西垣内 (2015) では、次の例のように「自分」が現れる節に「来る」のような「ダイクシス」助動詞が投射することで「有意識条件」の違反を含む文の「自分」束縛の容認性が高まることを観察している。

(23) ヨシコが自分<sub>i</sub>を呼びに来た時、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

ここでは「来る」を主要部とする「ダイクシス」投射指定部の pro が「視点焦点」を探し、「タカシ」がこの pro のコントローラとなって結果的に「自分」の先行詞と解釈することが可能となる。

(24) ...[視点焦点]<sub>i</sub>...[DeixP pro<sub>i</sub> [...自分...]] 来る<sub>Deix</sub>

例文(20)の容認性が高いことは、「ダイクシス」助動詞がなくても、文中に「ダイクシス」投射と「一致」する要素があれば「ダイクシス」投射指定部に pro が投射され、「視点焦点」によるコントロールが可能になるということである。この文でその役割をしているのが「となりの」である。

(25) [DeixP pro<sub>i</sub> [となりの<sub>i</sub>...自分<sub>i</sub>...]] Deix ]...タカシ<sub>i</sub>...

本論文の主題に関連して、関与する「自分」の解釈での例文(20)が「ロゴフォリック階層」に対して持っている決定的に重要なポイントは、この文の「となりの」が「タカシ」の視点を表すものでなければならないということである。「となりの」を話者の視点を表すものと解釈すれば、この文の「自分」の先行詞を「タカシ」とする解釈は消滅する。

「ロゴフォリック階層」の観点から言うと、(20)の「となりの」は「基準」の視点を表すもので、「基準」の視点を表す「主観表現」は「自己」「伝達源」の視点をも表し、この文には文中に「自己」「伝達源」の談話役割を持つ項が存在しないので、「話者」が「自己」

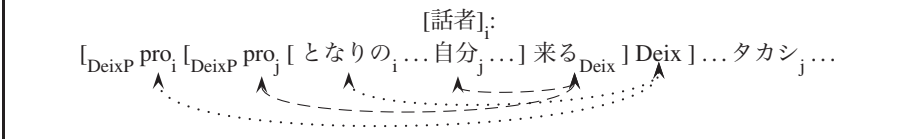
ないし「伝達源」の談話役割を持ち、結果的に「となりの」が話者の視点を表す解釈が存在すると予測されるが、(20)の「となりの」についてはこの予測は誤ったものである。

本論文の観点から言うと、「となりの」が「ダイクシス」投射と「一致」の関係を持つことがこの文の「自分」が「視点焦点」である「タカシ」を先行詞とする解釈の必要条件なのである。

ダイクシス表現「となりの」に加えて、ダイクシス助動詞「来る」を同じ文の中に用いると、興味深い現象が観察される。

(26) となりのヨシコが自分<sub>i</sub>を呼びに来た時、タカシ<sub>j</sub>はぐっすり眠っていた。

この文では、(20)と同じく、「となりの」を「タカシ」の視点を表す表現と読むことができるが、(20)と異なり、「となりの」を話者の視点を表す記述と解釈することも可能となる。<sup>1</sup>しかし、ここでも「来る」は「タカシ」の視点から見て「来る」のでなければならぬ。これは、同じ文に現れる2つのダイクシス表現が別々のダイクシス投射と関連づけられ得ることを示している。「来る」はそれ自体がダイクシス投射をなし、「となりの」は「来る」より高い位置のダイクシス投射と「一致」の関係を持てると仮定すると、(26)は次の「一致」の関係を含む表示を持つ。

(27) 

この表示で、上位の DeixP 指定部の pro が「話者」によってコントロールされれば、問題の「となりの」が話者の視点からの記述となる読みが得られると思われる。

しかし、(27)の表示は、西垣内(2015)の日本語の「阻止効果」に関連して提案した「指標の一貫性」の違反を含むものである。<sup>2</sup>

#### (28) 指標の一貫性

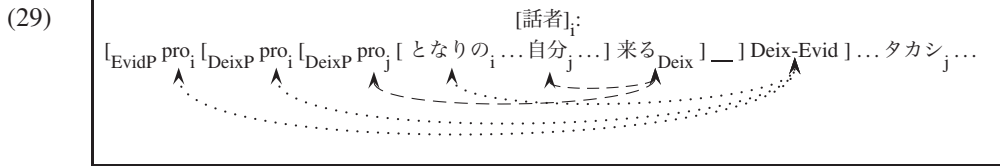
「基準クラス」視点投射の指標は同一でなければならない。

(27)の表示では、「基準クラス」に属する2つのダイクシス投射がそれぞれ別の「一致」関係を持っており、異なった指標を持つことになり、これは「指標の一貫性」の違反である。

しかし、ダイクシス投射の上位に「証拠性」Evidが投射することは可能である。DeixP 指定部の pro は「意識焦点」を探し、文中には該当する項がないので「話者」がコントローラとなる。問題は、どうすれば「となりの」を「話者」の視点の記述とできるかである。われわれの分析的枠組みでこれを可能にするのは、「となりの」が「一致」の関係にある「ダイクシス」投射を主要部移動し、「証拠性」に従属させることである。

<sup>1</sup>新井文人氏 (p.c.) の指摘による。

<sup>2</sup>Nishigauchi (in progress) では、これを「矛盾する一致」(conflicting Agreement) と言っている。



これによって、「となりの」は「証拠性」の「一致」領域に入り、「証拠性」投射の指定部 SpecEvidP の pro は「意識焦点」を探し、文中の項の中にその候補がないので、「話者」がそのコントローラとなる。

西垣内 (2015), Nishigauchi (in progress) で、「基準クラス」の視点投射が異なる指標、「一致」関係をもつことが日本語の「阻止効果」を引き起こすことを主張しているが、(26) で「となりの」が「話者」の視点を表すものと解釈しても「阻止効果」に相当するものが起こらないということは、「ダイクシス」投射が「証拠性」投射の位置へ移動することで、後者に取り込まれ、「意識クラス」の視点投射の一部となるものであることを示している。

### 3.6 中国語の「有意識条件」とダイクシス表現

前節で観察したダイクシス表現に関わる現象を観察することは、「自分」と中国語のそれに相当する *ziji* 「自己」の間の微妙な差異に光を当てることにつながる。

中国語で有意識条件が有効であることは、Huang and Liu (2001) によって提示されている次の例文の容認性が低いことによって示される。(Huang & Liu, 2001, (46))

- (30) ??[(*Dang*) *Lisi piping ziji*] *de shihou, Zhangsan zheng zai kan shu.*  
 (at) Lisi criticize self De moment Zhangsan now at read book  
 ‘At the moment Lisi was criticizing self, Zhangsan was reading.’

容認性の判断 (“??”) は Huang and Liu (2001) によるものである。この文の容認性判断が日本語の (21) と同じく ‘\*’ とならない理由は明らかでないが、Huang and Liu (2001) は有意識条件に従う次の文 (Huang & Liu, 2001, (45)) とは対比があるとしている。

- (31) *Yinwei Lisi piping ziji, suoy Zhangsan hen shengqi.*  
 because Lisi criticize self so Zhangsan very angry  
 ‘Because Lisi criticized self, Zhangsan was very angry.’

一方、Huang and Liu (2001), Huang, Li, and Li (2009) で用いられている次の例文について：

- (32) [*Zhangsan lai kan ziji*] *de shihou, Lisi zheng zai kan shu.*  
 Zhangsan come see self De moment Lisi now at read book  
 ‘Lisi was reading when Zhangsan came to visit him.’

同じ例文だが、Huang and Liu (2001, 156, 例 (35c)) では ?, Huang et al. (2009, 346, 例 (46c)) では ?? という容認性の判断を示しており、いずれにしても日本語のそれに対応する (23) などに比べて低い容認性が示されている。James Huang 氏 (私信) は、同例文の2つの著作物での判断の相違は特に意図したものではないとしている。このことは中国語 (Mandarin) の *ziji* の束縛では「有意識条件」は日本語におけるより強くはたらいており、本稿で仮定する枠組みで言えば、そこに関与するコントロールには「視点焦点」を探すものがないという可能性が考えられる。

ここで注目したいのは、日本語の (23) では「時」節にダイクシスの助動詞「来る」が使われることで「有意識条件」によって容認性の低い (21) との対比が見られるのに対し、中国語では「来る」に相当する *lai* が使われる (32) と、それが使われていない (30) との間には容認性の差がないということである。James Huang 氏 (私信) は、この両例文について、*lai* のありなしは容認性にまったく関与しないことを確認している。このことから、Nishigauchi (in progress) は、*ziji* が日本語の「自分」と異なり、基準クラスの視点投射と「一致」しないと仮定することで「自分」と *ziji* の特性の違いを捉えようとしている。

ところが、中国語で (20) のようにダイクシス表現「となりの」に相当する表現を含む次の文は、「有意識条件」に従わないにもかかわらず容認性が高いことを Nishigauchi (in progress) は観察している。

- (33) ?[(*Dang*) *pan bian de ren piping ziji de shihou, Zhangsan, zheng zai*  
(at) neighbor DE person criticize self DE moment Zhangsan now at  
*kan shu.*  
read book

‘At the moment a neighbor was criticizing self, Zhangsan was reading.’

Nishigauchi (in progress) は *pan bian* 「となり」がダイクシス投射と「一致」の関係を持ちうると考え、(33) を次のような構造と「一致」関係によって分析している。

- (34) ...Zhangsan<sub>i</sub>... [<sub>DeixP</sub> pro<sub>i</sub>... Deix [*pan bian*<sub>i</sub>... *ziji*<sub>i</sub>... ]]

*Pan bian* が「ダイクシス」と「一致」することで、ダイクシス投射の指定部に *pro* が投射され、この *pro* が日本語におけると同じように「視点焦点」を探すものであれば、Zhangsan によるコントロールが可能となり、*ziji* の先行詞ともなることができる。(33) の容認性が高いことは、これが可能であることを示している。「ロゴフォリック階層」に当てはめて言うと、*pan bian* が「基準」である Zhangsan の視点を表すことが (33) の容認性の必要条件である。*Pan bian* を「話者」の視点を表すものとして読むと、(33) は、*ziji* の先行詞を Zhangsan とする解釈ではまったく容認できない。

さらに次の例文を考えてみよう。



- (35) ?[(Dang) pan bian de ren lai kan ziji] de shihou, Zhangsan<sub>i</sub> zheng  
 (at) neighbor DE person come see self DE moment Zhangsan now  
 zai kan shu.  
 at read book

‘At the moment a neighbor came to see self, Zhangsan was reading.’

この例文の *ziji* の先行詞を Zhangsan とする解釈での容認性は (33) と同じである。ここで注目したいのは、(35) の *pan bian* と日本語の (26) の「となり」の「視点」に関する微妙な差異である。

- (26) となりのヨシコが自分<sub>i</sub>を呼びに来た時、タカシ<sub>i</sub>はぐっすり眠っていた。

上で観察したように、(26) の「となり」は「基準」である「タカシ」だけでなく「話者」の視点を表す表現として読むことができる。これが可能なのはダイクシス投射「来る」が「自分」と「一致」してその指定部 *pro* のコントローラが「視点焦点」である「タカシ」となり、「となり」はもうひとつ別のダイクシス投射と「一致」して、このダイクシス投射が (29) に示したように「証拠性」の位置へ主要部移動することができることによる。

他方、Nishigauchi (in progress) の分析では中国語では「来る」に相当する *lai* が *ziji* と「一致」することはなく、(35) で「視点焦点」である Zhangsan によるダイクシス指定部 *pro* のコントロールが可能なのは *pan bian* 「となり」がダイクシス投射と「一致」することのみに依存する。従って、日本語の (26) の「となり」と異なり、*pan bian* が「話者」の視点を表す解釈は不可能である。「ロゴフォリック階層」が、このような日本語と中国語の微妙な差異を予測することができないことは言うまでもない。

#### 4. 結論

本論文の目的は、Nishigauchi (2014), 西垣内 (2015) で提示した「自分」束縛の分析が Sells (1987) によって主張されている「ロゴフォリック階層」に関連する経験的データをどのように分析するかを示すことである。

Sells (1987) の「ロゴフォリック階層」の基盤となっているのは、「伝達源」である人はその心理状態が表現されている人（「自己」）でもあり、またその人の視点から命題内容が記述されている人（「基準」）でもあるが、その逆は成り立たないという意味的な直感である。

本論文の主張は、「ロゴフォリック階層」の効果は、関与する「主観表現」が一致の関係を持つ「視点投射」が主要部移動することで上位の「視点投射」の「一致」の領域が拡大することによって結果的に派生する現象であるということである。

本論文で示したいいくつかの事実は、意味的な直感に基づく「ロゴフォリック階層」がもたらす予測とは異なったものである。例文 (5a) の「不可解」は本来「自己」の視点を表すもので、「ロゴフォリック階層」によれば「伝達源」としての「話者」の視点をも表

すものであるはずだが、事実はそうではない。われわれの分析では、この事実は「不可解」が「発話行為」投射と「一致」の関係を持ってないことによって説明される。

例文(7b)の、本来「基準」(われわれの「視点焦点」)の視点を表す「となりの」は文中の「自己」の談話役割を持つ項の視点を表すことができるが、「ロゴフォリック階層」の予測に反して、「伝達源」の役割を持つ話者の視点を表す解釈はない。きわめて微妙な解釈判断を含むものだが、われわれの分析では、この事実は「となりの」と「一致」する「ダイクシス」投射が、文中の項「タカシ」にコントロールされる pro と「一致」する「証拠性」投射を超えて「発話行為」投射の位置へ移動することができないということによって説明できることを示した。すなわち、ここに関与する視点投射の主要部移動は「最小性」(Minimality) という統語的移動操作に対する一般的な制約に従うものであるという重要な理論的帰結を示した。

例文(7c)の「となりの」は、この表現が「基準」の視点を表すことがこの文の「自分」が「有意識条件」の違反を含むにも関わらず意識を持たない「基準」の談話役割を持つ項(われわれの「視点焦点」)を先行詞として解釈できることの必要条件であることを示し、「となりの」が「ロゴフォリック階層」に反して「自己」ないし「伝達源」としての話者の視点を表すことができないことの理由を説明した。

## 参考文献

- Huang, Cheng-Teh James, Li, Yen-hui Audrey, & Li, Yafei (2009). *The syntax of Chinese*. Cambridge University Press, Cambridge, UK.
- Huang, James C.-T. & Liu, Luther (2001). Logophoricity, Attitudes and *ziji* at the Interface. In Cole, Peter, Hermon, G., & Huang, James C.-T. (Eds.), *Long Distance Reflexives: Syntax and Semantics 33*, pp. 141–195. Academic Press.
- Kuno, Susumu (1972). Pronominalization, Reflexivization, and Direct Discourse. *Linguistic Inquiry*, **3**, 161–195.
- 久野暲 (1978). 『談話の文法』. 大修館, 東京.
- Nishigauchi, Taisuke (2014). Reflexive Binding: Awareness and Empathy from a Syntactic Point of View. *Journal of East Asian Linguistics*, **23**, 157–206.
- 西垣内泰介 (2015). エンパシーと阻止効果—「自分」の束縛と「視点投射」—. 『言語研究』, **146**, 109–133.
- Nishigauchi, Taisuke (in progress). The blocking effect in Chinese and Japanese. Paper read at a syntax meeting, the Department of Linguistics, University of Delaware, August 2014.
- Rizzi, Luigi (1990). *Relativized minimality*. The MIT Press, Cambridge, MA.

Sells, Peter (1987). Aspects of Logophoricity. *Linguistic Inquiry*, **18**, 445–479.

Speas, Margaret (2004). Evidentiality, Logophoricity and the Syntactic Representation of Pragmatic Features. *Lingua*, **114.3**, 255–276.

**Author's web site:** <http://banjo.shoin.ac.jp/~gauchi/>

(受付日: 2015.1.10)